

機関番号：32608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 年～2010 年

課題番号：21830105

研究課題名（和文）近代日本における子ども文化事業の成立過程：

久留島武彦のメディア論的考察をつうじて

研究課題名（英文）The development of cultural projects for children in modern era of Japan: An analysis of Takehiko Kurushima in media history

研究代表者

大島 十二愛 (OSHIMA SONIA)

共立女子大学・文芸学部・講師

研究者番号：90526089

研究成果の概要（和文）：

本研究は、近代日本における子ども向け文化事業が企業（とくにマス・メディアや百貨店）におけるインフラ整備と児童文化者らのヒューマン・ネットワーク形成とが平行に展開していく過程を提示しようとする試みである。従来の児童文化論といえば、児童文学作品の内容分析や作家論がその中心であった。一方、本研究が目指したのは、とりわけ久留島武彦（明治時代から昭和初期にかけて活躍した日本を代表する口演童話家の一人で児童文化者）のこれまであまり明らかにされていなかったメディア実践者としての活動をメディア史の枠組みのなかで提示することである。今回のプロジェクトでは、久留島が編集者として携わった国内初のカラー刷り週刊子ども新聞『ホーム』のデジタル化保存、資料目次等の収集およびデータ化を終えた。その成果の一部をまとめた、拙稿「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」では、その後日本の放送文化や美術界を牽引するエポックメーカー達がほぼ同じ時期に『ホーム』紙上に編集者や挿絵画家、記者の形で集っていたことが明らかになった。そしてそれは、近代日本における子ども向け文化事業が、児童文化者らのグループのみならず、多様なメディア企業における重層的な人的コミュニティネットワークによって家庭と社会、家庭と学校、社会と学校を直接的に媒介したという筆者の主張を強化するものである。

研究成果の概要（英文）：

This study attempts to clarify the development of cultural projects for children, which coincided with both the establishment of infrastructure in the corporate sector, including department stores and the mass media, and the construction of a human network among juvenile culture specialists. Studies of juvenile cultural theory have thus far tended to focus on the lives of juvenile authors or to concentrate on analyzing their works. By focusing on the case of Takehiko Kurushima (1874-1960), this study aims to shed light on the previously unexamined role of specialists in juvenile cultural within the context of media history. Kurushima, a journalist, was one of the most famous storytellers in modern Japan.

The participants in this project have completed the digitalization of a series of “Home”, a weekly journal for children, as well as collecting the contents data. Based on the results of this research, I completed an article, “Takehiko Kurushima as Journalist and His Weekly Journal for Children: An Analysis of “Home”, a Sunday Supplement to *The Chuo Shimbun*, and Its Digital Preservation” which was published in *Studies in Arts and Letters The Faculty of Arts and Letters* 57 (2011). In this paper, I show that leaders in the development of broadcasting for children and modern art were also serving as editors, illustrators, and journalists on the staff of “Home” newspaper at almost the same time. This supports my argument that, through

multilayered community networks among media firms as well as a group of writers of children's literature, cultural projects for children in modern Japan not only formed connections between the home and school, but also linked both the home and school to society at large.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	760,000	228,000	988,000
2010年度	750,000	225,000	975,000
年度			
年度			
年度			
総計	1510,000	453,000	1963,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：メディア史、歴史社会学、久留島武彦、子ども文化事業、デジタルアーカイブ、家庭教育、子ども新聞

#### 1. 研究開始当初の背景

1990年代後半から2000年代にかけて、百貨店文化研究が建築史や歴史社会学、文化研究等の分野で広く検討されてきた。とりわけ、近代における百貨店＝デパートメントストアが、日本社会に西洋的な思想や家庭像を可視化し、さまざまな形で提供してきた文化的側面が指摘され評価されたことは重要であった。今でこそ、メディアといえはいわゆるマスコミに代表されるマス・メディア企業を想起されがちであるが、企業の役割が未分化であった近代において、人々に新しい情報や思想・文化を、物品や催事を通じて提供していた場をメディアであると定義するならば、百貨店はまぎれもなくメディアであった。

メディア史を専門とする代表者は、これまで子ども博覧会という催事のもつメディア性に関心を払ってきた。そうした催事と企業自体が近代化していく過程が互いに連動しあっていること、そこに関わる多種のコミュニティが、多くのマス・メディア間のヒューマン・ネットワークと重なりあっていることが次第に分かってきた。しかし、それらコミュニティが、現在における企業形態や有り様を基盤にして分析することに対しては限界も感じていた。つまり、先に述べたように、メディアとしての役割やその業態が分節化される以前の混沌とした、重層的なコミュニティを、既存の区分にとらわれることなく柔軟に分析する方法論や枠組みが必要であると痛感したのである。

また、大阪毎日新聞社主催「皇孫子ども博

覧会」の調査で大分県玖珠町を訪問した際、多くの貴重な原資料が、時間の経過と共に劣化し、厳しい保存状況にあることを目の当たりにした。また、大分先哲史料館においては、久留島武彦関連資料が収蔵庫に丁寧に保管されていたものの、古新聞や写真、紙資料などデジタル化保存が急務と思われるものが少なくなかった。

そうした状況下、研究当初、主として二つの役目を自分自身の研究に課した。一つは、貴重な資料を物理的にデジタル技術を用いて保存すること、二つ目は、マス・メディアおよび百貨店における文化事業のインフラ整備に伴い、社会のなかで子ども文化が受容・消費・形成される過程を実証的に解明することである。

個々のトピックをどう通史として整理しうるかの枠組みの検討を実証的な作業と同時並行して行う必要があった。

#### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、近代日本における子ども向け文化事業（子ども新聞、口演童話会など）が企業インフラ整備と共に互いに影響しあいながら展開していく過程を、歴史資料から実証的に検証すること、そしてそれら近代子ども向け文化事業に関連する歴史資料のデジタル化および保存を行うことである。

わけても久留島武彦という明治から昭和初期にかけて活躍した児童文化者の、とくにメディア実践者としての活動を基軸に検討

し詳察することで、これまでの郷土史研究、児童文化研究のみの視点だけではなく、メディア文化研究の視座に力点を置いた、新しい切り口と枠組みを提示しようとする意図が込められていた。

(2) 企業文化のなかで、また社会そのものの中で、「子ども」という存在がどのように歴史的に位置づけられてきたのか。近代教育体制定着後の日本において児童文化から子ども文化へどうシフトしていき、そこにはどのようなコミュニティやネットワークが存在し、どのような催事や文化活動を通じて関連し、子ども文化事業発展が為されてきたのか。日本における子どもにまつわるメディア文化の萌芽期からその後出版文化（少年少女雑誌との関わり）や放送文化（ラジオ放送におけるこども番組、教育番組）へと連綿と続く過程を明らかにすることを目的としている。

社会学、児童文学、教育学、文化資源学、経営学、メディア研究など、他領域ないし隣接する領域の研究者らと今後も積極的に連携をはかりながら、近接する諸問題や意識を共有し包括的に扱おうる「子どもメディア教育」研究のあり方を提示し、将来的には諸外国との比較研究の俎上にのせ、日本独自の子ども文化や企業文化の中での事業活動をより明確に相対化していきたい。

### 3. 研究の方法

実質的な作業方法としては、本研究を進めるにあたり、各地に点在する史資料収集に伴う資料室や編纂所、図書館および史料館への訪問調査と関係者へのインタビュー調査、加えて資料保存および活用のための高精細画像によるデジタル化作業を中心に行った。今回の研究補助を得る以前より、史料館や関連機関との連絡や事前調査を行っていた為、どのような資料が何処にどれくらいの分量があり、どのような保管状態にあるか等、大まかな状況を把握できていたことは幸運であった。それにより、この研究補助期間内にどの資料をデジタル化するのが急務かといった判断を迅速に行えたと同時に、研究目的を明確にすることができた。また、久留島武彦の元秘書であった赤木要女さん（2011年4月より岡山県津山市へ転居在住）、畑先龍定住職（和歌山県みなべ市在住）との交流や、大分県立先哲史料館館長、研究員の方々、玖珠町の役場のみなさま、北九州市到津の森公園の事業部のみなさま、全国童話人協会会員各位より、資料提供や貴重なお話を伺うこともでき、活字資料だけでは知り得ない久留島のエピソードなどをさまざまな形で知ることとなった。それは本研究で目指した久留島像

をより多面的な角度から評価するうえでの大きな助けとなったように思う。危惧されるのは、関係者の高齢化が著しいため、今その声を集めなければいけないという時間の問題と、記憶の揺らぎをいかに精査するかという点であり、これらは今後研究を続けていく上での課題でもある。

また、方法論の課題としては、メディア文化研究の中に児童文化者と語られる人を位置づけるうえでの理論的かつ説得的な枠組みを、実証的な作業と同時にどこかの段階で打ち出していく工夫が求められるということである。

### 4. 研究成果

(1) 2009年度は、大分県立先哲史料館・東京都港区NHK放送博物館および図書館を訪問調査した。とくに、子ども新聞事業の観点から特筆すべき役割を演じた中央新聞週報『ホーム』64号すべてをデジタル化保存する作業を実施し、終了させた。大島（2011）「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」に、成果の一部がまとめられ公表されている。NHK放送博物館および図書館では、初期ラジオ放送における「こどもの時間」プログラムに於ける久留島と口演童話に関する資料予備調査を行い、草創期の放送文化のなかで子どもがどのように位置づけられていたのかを検討する手がかりを得た。初年度は、本プロジェクトの主軸の一つである史資料のデジタル化保存作業と、周辺資料の精査に多くの時間を割いた。保存したデータ資料はDVDにも記録し、所蔵館へも2010年4月に寄贈した。

(2) 2010年度は、前年度に行った資料調査をもとに、それを整理分析する作業が中心となったが、引き続き資料調査も必要に応じて継続した。2010年6月5日（土）には、久留島武彦没後50年51回忌法要のお墓参り（於：神奈川県横浜市總持寺）を全国童話人協会榎葉和英会長ほか同会東京支部会員十余名らと共に行った。その際、生前の久留島の姿を直接知る会員からも、お話を伺うことができ、貴重な機会となった。また、6月26日（土）から28日（月）の期間、大分県玖珠町と福岡県北九州市小倉へ出張調査を敢行した。大分県玖珠町へは、東京から同行させていただいた久留島武彦の元秘書赤木要女さんと共に訪れ、27日（日）には大分県玖珠町教育委員会企画による『久留島武彦』顕彰記念式典（於：メルサンホール）および同町久留島会および親族らによる『久留島武彦』没後50周年法要（於：安楽寺）、第109回全国童話人協会総会（於：望山荘）に

参加し、久留島武彦ゆかりの人々や研究者らと交流を図ることができ、多くの刺激を受けた。没後 50 年という節目の年に、そうした人たちとの交流のなかで、久留島をめぐる児童文学研究における近年の海外研究者の評価や、地元玖珠町における先哲への顕彰のあり方を知る好機となった。かつて赤木さんが久留島先生と口演行脚で周辺を訪れた当時のエピソードと共に貴重なお話をインタビューから伺うことができた。また、赤木さん同様、晩年の久留島と深い交流のあった和歌山県常福寺住職の畑先龍定さんからも、久留島の思い出話や彼の思想理念についてお話を伺う機会も得、研究書からだけでは知り得ない久留島の人となりを知る良い機会となった。28 日（月）は、北九州市小倉の到津の森公園を訪問調査した。到津の森公園では、1937 年より久留島武彦が同園（旧称到津遊園）で、子どもの健康推進と情操教育提供の場として開催していた林間学園（夏期芸術教育林間学園）関連の調査を実施し、同園園長代理事業担当係長松岡氏に資料室や林間学園の野外ホールなどをご案内いただいた。

2009 年度にデジタル化を完了した史資料の内容分析をもとに、コンテンツ文化史学会 2010 年大会「拡大するコンテンツ」にて報告を行い、論文「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」（『共立女子大学文芸学部紀要』第 57 集）を公表した。また、アルバイトの協力を得て紙面データから目次コンテンツを取り出し、紙面目次一覧データを作成した。

資料点数や資料整理の進捗状況との兼ね合いで、研究補助期間中にまとめることが叶わなかった『ホーム』資料集や、その他論文としての成果を公表できなかったものについては、今後、追加調査および追加資料を加えて、次年度以降、論文公刊や研究成果として報告することとしたい。

(3) 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の被災状況をテレビニュースや新聞、動画サイトなどで目にしながら、改めて史料保存の困難さを思い知ることとなった。それと同時に、デジタル化保存やデジタルアーカイブのもつ可能性についても思いを新たにしたい。人命をおいて他に一番大切なことは無いが、生き残った人たちが、その先の人生のよすがにできるもの—自分の生まれ育った町の風景や記憶、思い出、文化、歴史—がもしあるとするならば、それを遺すためのお手伝いを、デジタルアーカイブやデジタル複製物を複数機関や個人が分散所蔵することで少しは役立てられるのではないかと、そうした思いをつなぐ研究をしたいという気持ちを一層強くさせる出来事であった。国から補助金を得

て研究活動をさせていただいている一研究者として、微力ながらも、人々の思いに寄り添う研究をしていきたいと思う。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①大島 十二愛、「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」、『コンテンツ文化史学会 2010 年大会予稿集』、査読無、2010 年、pp. 21-30

②大島 十二愛、「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」、『共立女子大学文芸学部紀要』、査読有、第 57 集、2011 年、pp. 125-141

〔学会発表〕（計 1 件）

①大島 十二愛、「新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル—中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に—」、コンテンツ文化史学会、2010 年 11 月 20 日、東京大学工学部 2 号館 93B 教室

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大島 十二愛 (OSHIMA SONIA)  
共立女子大学・文芸学部・講師  
研究者番号：90526089

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし